

国立循環器病研究センター 心疾患についての研修

― 心疾患のある児童生徒への教育的配慮 ―

本校訪問教育部

1 はじめに

本校訪問教育部には国立循環器病研究センターに入院して心臓移植を待つ児童生徒が在籍している。本校訪問教育部では、このような児童生徒に対して、病院と連携してよりよい教育的支援ができるよう、また心疾患について理解を深めるために国立循環器病研究センターより講師を招いた研修会を実施している。今年度は、同病院の坂口平馬医長によるお話を聞かせていただいた。今回は、本校の教員のみではなく、大阪府内において心疾患のある児童生徒と関わる教員も対象として実施した。



2 概要

日 時	令和 6 年 7 月 23 日（火）14:00～16:00
場 所	本校 2 階多目的ホール
講 師	坂口 平馬 医長
対 象	当校教員 大阪府内において心疾患のある児童生徒と関わる教員
テーマ	心疾患のある児童生徒への教育的配慮

3 主な心疾患と生活内の制限

今回は、大阪府内の小中学校、高校に勤務する教員も参加しており、地域に在籍している児童生徒に多く見られる心疾患に関する内容が主に取り上げられた。

① 心房中隔欠損症

心房中隔欠損症は、心臓の上方に存在する左右の心房を隔てる壁である心房中隔に穴が存在する状態を指す。先天性心疾患の中でも6～10%を占めている。時々、手術の影響で不整脈が出ることがあるが、ほとんどがほぼ普通の人と同じように生活できて、運動などの制限もなく、薬を飲み続けることもない。

② 心室期外収縮

心室で発生した異常な電気刺激によって、正常な拍動が起こる前に心室が活性化され、それにより余分な拍動が生じる病気。15歳前後で発症するケースが多いが、特に運動制限等の生活内での制限はない。

③ WPW症候群

WPW(Wolf-Parkinson-White) 症候群は、生まれつき心臓に異常な電気刺激回路が存在することで不整脈を引き起こす病気であり、この病気を発見したウォルフ・パーキンソン・

Ⅲ 公開講座

ホワイトの3名の名前の頭文字を取ってWPWと名付けられた。運動制限等は特に必要がないが、大人になってプロスポーツ選手や客室乗務員等につきたい場合は治療してからでないと就くことができないこともある。

④ QT延長症候群

心臓の電気伝達の異常によって、気を失ったり突然死をきたすことがある病気である。遺伝子異常が原因になることが多く、現在15種類のQT延長症候群が見つかっており、そのうち3番目まで(LQT 1-3)が90%を占める。LQT1患者は、マラソン、水泳等の持続する運動中に失神発作、心停止、突然死などの心事故が多く、運動制限は必須である。LQT2患者の心事故の多くは、恐怖や驚愕などの情動ストレスや、目覚まし時計などの睡眠中の雑音による覚醒時など、急激に交感神経が緊張する場合に多い。そのため、ある程度の運動制限が必要となる。LQT3患者の心事故の多くは、運動とは関連が少なく、むしろ夜間、睡眠中や安静時に多い。そのため、運動制限は特につけないことが多い。

⑤ ブルガダ症候群

ブルガダ(Brugada)症候群とは、突然命に関わる重篤な不整脈が起こる、または起こる可能性がある病気である。心臓の構造や機能自体は正常で、発作を起こすまでは全く普通に日常生活を送っていることが多い。運動制限等は有酸素閾値により決めている。

⑥ 肥大型心筋症

心筋症は、心筋そのものの異常により心臓の機能異常をきたす病気であり、肥大型心筋症は、心肥大をおこす原因となる高血圧や弁膜症などの病気がないにもかかわらず、左心室や右心室などの心筋の肥大がおこる病気である。この病気は、突然死が起こる可能性があり、運動制限を厳しくかける必要がある。

4 心疾患の児童生徒との関わり

心疾患は、それぞれの疾患により制限の有無やその制限の内容も異なる。心疾患の児童生徒の中には、ペースメーカーを装着している児童生徒が在籍する場合もある。ペースメーカーのコイル状になっているリードに力が加わると、危険な場合があるため、鉄棒などの活動が不可となる。また、机にお腹をつける行為も危険を伴うため注意する必要がある。

運動制限がなくても、運動をしていて体力のピークを感じるのは他の児童生徒の8割の運動量である。小学校低学年の場合は、それほど他の児童との体力の差はないが、小学校中学年や高学年になると、その差は少しずつ出てくる。体育の時間で走ってクールダウンをしている時に事故になることもある。日常生活が他の児童生徒と同じ形で進めることが難しいという点に留意しておく必要がある。

5 まとめ

疾患により、生活内での制限をかけられる場合はあっても、積極的に制限をかけず、その子がやりたいことをその時にできる形で実現することが大切である。

肥大型心筋症の患者で、球技部に入りたかった患者がマネージャーとしてその部に入部し、パス出しなど本人ができる形で活動していたことがあった。疾患による制限はあっても、その時に本人がしたいと思うことをなるべく実現できるような関わりをする必要があると感じた。